

他大学の子育て支援センターの見学報告
—本学「親と子どもの発達センター」のあり方を検討するために—
Report on Onsite Inspection of Child-Rearing Support Center
of Other University
—To Review the Parent-Child Development Center of Our University

岸本美紀^{*}・小原倫子^{*}・小野隆^{*}・野田美樹^{**}・横田典子^{**}・
安藤久美子^{***}・関谷仁美^{***}

KISHIMOTO Miki, OBARA Tomoko, ONO Takashi, NODA Miki, YOKOTA Noriko,
ANDO Kumiko, SEKIYA Hitomi

要 旨：

本報告は、大学内にある子育て支援センターの見学結果を報告するとともに、本学「親と子どもの発達センター」の今後の活動のあり方について考察を行ったものである。日本初の大学内の子育て支援センターである東京都市大学「ぴっぴ」を見学し、特色を理解した。そこから、教員や学生の利用が比較的多いこと、運営の自由度が高いなど、本学「親と子どもの発達センター」の特色や課題を理解することができた。

Abstract

As reported in this paper, the author made an onsite inspection of Child-Rearing Support Center “Pip-Pip” of Tokyo City University, and understood its features. In comparison to this institution, the author considers the future way of being of the in-campus child-support center of this university, which is featured by comparatively frequent use by faculty members and students and the high degree of management freedom.

キーワード：大学内子育て支援センター、見学報告、親と子どもの発達センターのあり方、子育て支援

Keyword：In-campus child-support center, report on onsite inspection, way of being of parent-child development center, assistance to child rearing

I. はじめに

本学「親と子どもの発達センター」は、大学付属の子育て支援施設であり、①人材育成の拠点、②親子発達研究の拠点、③地域貢献活動の拠点を目標としている。平成27年度は、活動を開始してから3年目となり、地域の子育て支援施設として定着しつつある。また、センター員が試行錯誤しながら計画・実践してきた事業や活動についても、内容や展開の方法が確立してきている。しか

し、その一方で継続して挙がり続けている課題があるとともに^{1) 2)}、新たな検討事項が生じている。

そこで、今後の「親と子どもの発達センター」における活動のあり方について検討するため、本学と同様の大学内にある子育て支援センターを調査することで、示唆を得たいと考えた。

大学内にある子育て支援センターについては、大学独自で運営しているものと自治体から委託されたり自治体と連携したりすることによって運営

^{*}岡崎女子大学子ども教育学部 ^{*}岡崎女子短期大学幼児教育学科

^{***}岡崎女子大学・岡崎女子短期大学親と子どもの発達センター

されているものがある³⁾。また、施設が大学のキャンパスにある場合、附属幼稚園等の保育機関にある場合などさまざまである。本学の「親と子どもの発達センター」は、運営は大学独自であり、施設も大学のキャンパス内にある子育て支援センターである。

本報告では、本学と同様に大学が運営を行っている他大学の子育て支援センターの実情を把握することで、今後の「親と子どもの発達センター」の活動のあり方について考察を試みる。

Ⅱ. 対象・方法

1. 調査対象の選定

大学内にある子育て支援センターのうち、①大学独自で運営しているセンター、②自治体から委託されたり自治体と連携したりすることによって運営されているセンターがある。今回は、日本で初めての大学内子育て支援センターである東京都市大学「ぴっぴ」を選定した。

2. 調査の方法

(1) 調査時期

平成 27 年 7 月 30 日（木）11:00～12:30

(2) 調査の方法

施設を見学させていただき、担当者と 30 分程度の面談を行った。

Ⅲ. 結果

1. 東京都市大学「ぴっぴ」

(1) 日時

平成 27 年 7 月 30 日（木）11:00～12:30

(2) 場所

東京都市大学 等々力キャンパス 3 号館 2 階 人間科学部児童学科 実習指導室

(3) 面談者

東京都市大学 教授 小川清美先生

(4) 面談内容

<「ぴっぴ」について>

今年度で 12 年目。前身の東横学園女子短期大学時開設。大学初の子育て支援センター。多くの大学のセンターが自治体の支援を受けているが、「ぴっぴ」は受けていない。

行政より先に始めた。

<施設の利用について>

開設日時：月曜日から金曜日 10 時～16 時

土曜日 10 時～13 時

8 月は休み

利用者：世田谷区民が多いが、近隣自治体からも来所

利用料：200 円

東京都市大学になってから、予算の都合で値上げ

保険料、飲み物代含む

玄関前に券売機があり、そこでお金を払う

入場制限：なし。一度入所すれば、自由に行き来してよい。

40 組以上の親子が室内にいと、入り口に「ただ今混み合っています」というパネルを掲示するが、入場は保護者に任せる。多いとき、1 日 100 組の親子が来所したこともある。

<「ぴっぴ」担当職員>

保育士が 1 日 3 名、曜日でのローテーション勤務をしており、全員非常勤である。14 名登録している。もともと保育士、幼稚園教諭など現場経験のある人に入ってもらっている。卒業生は 1 名。現職の人を手伝ってくれている。65 歳以上の方が 6 名いる。

<大学教員のかかわり>

主に学科の教員で希望者が「ぴっぴ」委員となり、運営に携わっている。現在は 8 名。保育士のお昼時間に委員が受付等業務を手伝う。教員は時間割を考慮し、入れる日時を決めている。保育士資格・幼稚園教諭免許を持っている教員もいる。学部長がセンター長であるが、実質は小川先生が対応されている。小川先生は、開設日はなるべく学校にいて、対応できるようにしている。

月 1 回の保育士との会議を実施している。教員は出席できる人が出席する。議事録は、「ぴっぴ」の活動や現状を知ってもらうため、学科の全教員に配布している。

<学生の関与>

「子育て支援演習」の授業（保育士資格必修）で利用。2～4 年の 3 年間で 2 単位の授業。各学年前期・後期各 1 回、計 6 回「ぴっぴ」での実習を行う。2 年生後期からは、1 年間に 2 回以上「ぴっぴ」での実習を行ってよい。観察 60 分、記録 40 分で 1 コマ分（都市大学は、平成 27 年度 4 月より、100 分授業）1 時間 2 人までとしている。

この授業では、親を支援することを学ぶ。自分で話す相手を選び、親と話すことを学ぶ。授業で学んでから実践の場に臨む。

4年生になると、保育士に代わって受付を担当する力を備えてくる。

卒論で使う場合、審査を行い、許可が得られたら入ってよい。

保育実習前の事前実習は行わない。

< GP について >

東横学園女子短期大学時代、今「子育て支援演習」となっている取り組みが採択された。やりたい学生が実習を行っていた。

親を支援する大切さを学べる。

大学で初めて子育て支援センターを作り、これらの取り組みが認められたのではないかな。

< 保育者のかかわり >

年齢が比較的高い子どもの動きを見て声をかけるくらいで、保育者から何か働きかけることはほとんどない。例えば、滑り台に子どもが一人でしたら、保護者に「お子さんいますよ」と声をかける。

14 時くらいは怪我をしやすい時間帯のため、「眠いのかな」と子どもの気持ちを代弁するような声掛けをし、保護者が気づけるようにしている。

保育者同志が同じ考え方で関われるように、伝え合っている。こちらの方針に合う人に来てもらっているし、合う人を紹介してもらっている。

あくまでも、親が自分で育っていくのを支援する（見守る）スタンスである。

< 学食の利用 >

保護者はとてもよく利用している。学食のスタッフにも協力してもらっている。子育ての先輩として声をかけたり、配慮してくれたりする方もいる。はじめは利用について問題になることもあったが、今は「ぴっぴ」の利用者の時間を決め、学生等にあまり影響が出ないようにしている。学生も自然と受け入れるようになっていく。

< 予算 >

東横学園女子短期大学時代は、「ぴっぴ」の予算があったが、東京都市大学になってから、学部で運営することになったため、厳しくなった。利用費の値上げなど、事務の方が工夫してくれている。そのため、おもちゃ等の購入は現物寄付、教員の寄付等も行っている。

< その他（小川先生のお話） >

広場という役割を大切にしている。そのため、

保護者が自分で決めるということを尊重している。

専門家につないだらいいと考えたら、学内の教員につなぐこともある。行政につないだこともある（情報提供、11年で2回程度）。

自治体とはお金はもらっていないが、連携はとっている。「ぴっぴ」に研修にくることもある。区はノウハウを得ているのではないかな。

世田谷区の広場の会（20グループ程度）に所属している。広場の会に所属する広場には、「ぴっぴ」の利用者が開いたものもある。

親子がまた来たいと思えるようにしたい。保護者の全てを受け入れる訳ではなく、お伝えすべきことは伝えている。

はじめのころはいろいろなことがあった。しかし、大きな問題はなく来ている。日々の保育者の対応で防げている。

盗難事件が起きたときは、盗った人はわかっていたので小川先生が「コーヒー飲みましょう」と声をかけたりして防いだこともあった。また、貴重品を入れるポシェットを用意した。他にも盗難を未然に防ぐための工夫を保育者とした。

「大学のセンターとして、どこを研究のテーマにするのか、しっかりポリシーを定めていけるとよいのでは。どう生かせるかだと思う」というアドバイスをいただいた。

(5) まとめ

前身の東横学園女子短期大学から携わる小川先生にお話を伺い、11 年間という歴史の中でさまざまなことがあっても、「広場」という役割に強い意識と使命感を持ち、対応されてきたことが理解できた。予算等本学が恵まれている点も認識できたが、東京都市大学の学科の先生方が「ぴっぴ」のことを大切に思い、子育て支援に携わっていることに感銘を受けた。

<「ぴっぴ」室内の様子>



<「ぴっぴ」飲食可能スペース>



<「ぴっぴ」玄関>



(東京都市大学ホームページより <http://www.tc.tcu.ac.jp/pippi/aboutpippi.html>, 2015/12/9)

IV. 考察

東京都市大学「ぴっぴ」の見学、小川清美教授との面談内容から考えられる本学「親と子どもの発達センター」の特徴や課題を以下に示す。

1. 開催日について

「ぴっぴ」は、8月が休みとなっているが、それ以外の月は月曜日から土曜日まで開いている。「親と子どもの発達センター」は、休みの月はないものの週3日程度の開設である。表2～4から

わかるように、初回利用者(5名)、「子育て実践講座」(14名)、「みんなで子育て」(14名)と、「親と子どもの発達センター」への希望として、開設日の増加を挙げる利用者が一定人数存在する。利用者の希望に応えるためには、「ぴっぴ」のように担当できる保育者の確保が必要となるだろう。

2. 設備について

「親と子どもの発達センター」は、大学内の独立したセンターとして現在予算をいただき、運営がなされている。設備や備品については、おもちゃの種類や子ども図書館の利用など良い点もあった。この点については、表1から「親と子どもの発達センター」の初回利用者が、センター内の玩具や設備について満足していることがうかがえる。そのため、現状が維持されることが期待される。

一方で、「ぴっぴ」では利用者が飲食をしたり、くつろいだりするスペースがあったが、「親と子どもの発達センター」ではセンター内での食事は禁止の方針であるため、特別そのようなスペースは設けられていない。特に利用者から食事に関する要望は出ていないが、このハード面の不足を補うために、雰囲気やスタッフの対応が重要であると感じた。

3. 教員の関与について

「親と子どもの発達センター」は、大学内の組織であるため、教員のセンター員がおり、行事等の企画・運営に深く携わっている。また、「子育て実践講座」では学内の常勤、非常勤の教員が講師を務めたり、ゼミ企画「みんなで子育て」では教員が学生指導をしたり進行役を務めたりしている。そのため、教員の関与については決して少ない方ではない。しかし、学内で子どもとその保護者とかかわることができるという恵まれた状況でありながら、一定の教員や学生に固定される傾向にある。今後については、学生の学びや経験のためにも、様々な分野の教員の関与を期待したい。教員によっては、専門分野や担当科目のため、利用が難しいと考えていることが推察される。利用を促進するため、利用の具体例を提示したり、方法を提案したりすることも必要ではなかろうか。

4. 学生の関与について

本学教員の関与の仕方から、「親と子どもの発達センター」への学生の関与は少なくはない。また、行事などでボランティアを募集すると、最近

は積極的な参加者が増えてきた。学生の関与については、教員の関与に影響を受ける部分があるが、今後はより積極的な学生の利用を期待したい。なぜなら、通常の開設日でのボランティア利用が大変少ないからである。また、表3、4から、利用者が「学生ともっと触れたい」と回答している。学生は多忙であるが、空き時間や授業のない日に気軽に利用する習慣ができることを目指したい。岡崎女子大学は、平成28年度完成年度を迎える。東京都市大学「ぴっぴ」で4年生が受付を担当されているように、実習をやり遂げた学生が、積極的に「親と子どもの発達センター」で実践を続けてくれることを期待したい。そのための周知の方法や受け入れの体制について、検討する必要があると考える。

表1 「親と子どもの発達センター」初回利用者のセンターの雰囲気についての自由記述⁴⁾ (n=96)



表2 「親と子どもの発達センター」初回利用者のセンターに対する希望 (自由記述)⁵⁾ (n=16)

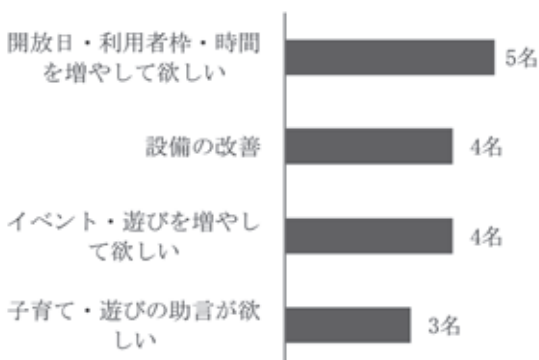


表3 「子育て実践講座」参加者のセンターに対する希望 (自由記述)⁶⁾ (n=39)

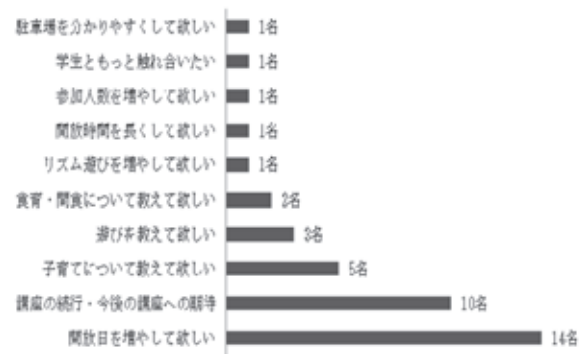
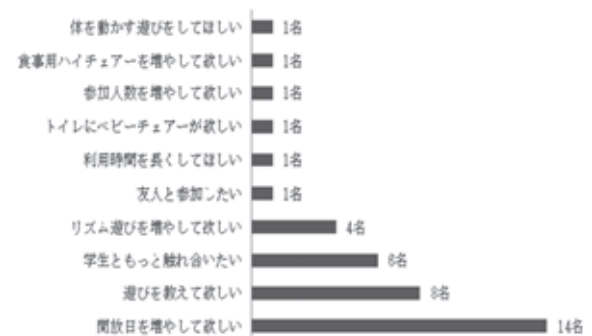


表4 「みんなで子育て」参加者のセンターに対する希望 (自由記述)⁷⁾ (n=38)



V. まとめ

今回は、1か所の他大学子育て支援センターの見学報告であった。しかし、日本で初の大学内子育て支援センターである東京都市大学「ぴっぴ」について、小川教授からお話を伺い、地域の重要な子育て支援の施設として定着するための努力や取り組みの重要性について理解することができた。また、本学「親と子どもの発達センター」の特色や課題も理解することができた。そして、今後の活動のあり方についても示唆を得ることができた。

東京都市大学「ぴっぴ」を見学し、「親と子どもの発達センター」は、企画や運営について、センター員に委託されている部分が大きいと感じた。この点は、教職員の意向が尊重され、自由度の高い運営となるというメリットがある。その反面、事務作業などの負担をはじめ、手探りの状態で仕事をしなければならないというデメリットもある。また、センター員が独断で企画・運営をしているというイメージを与えかねない。

「親と子どもの発達センター」は、開設されて

3年目となり、3つの目標①人材育成の拠点、②親子発達研究の拠点、③地域貢献活動の拠点について、求められるものが徐々に大きくなっていると感じる。今回見学させていただいたセンターの方々の子育て支援に携わる真摯な姿勢を心に刻み、今後の「親と子どもの発達センター」がよりよい施設となるよう役割を果たしていきたいと考える。

引用文献

- 1) 小原倫子・丸山笑里佳・岸本美紀・谷田貝雅典・安藤久美子, 子育ての悩みと、親と子どもの発達センターの役割に関する一考察－親と子どもの発達センター利用者の質問紙調査から－. 岡崎女子短期大学学術教育総合研究所報, 7, pp1-10, 2014
- 2) 岸本美紀・小原倫子・白垣潤・野田美樹・丸山笑里佳・安藤久美子・早川仁美・武藤久枝, 子育ての悩みと、親と子どもの発達センターの役割についての検討－利用者の育児の「困り事」、「相談相手」、「相談方法」の分析から－. 地域協働研究, 1, 13-18, 2015
- 3) 森下順子・村田和子・小笠原眞弓, 「地域子育て支援」の強化に向けた地域と大学の連携に関する研究. 平成 25 年度大学等地域貢献推進事業高等教育機関コンソーシアム和歌山研究成果報告書, 48-62, 2014
- 4) 平成 26 年度岡崎女子大学・岡崎女子短期大学親と子どもの発達センター事業報告, 2015
- 5) 前掲 4)
- 6) 前掲 4)
- 7) 前掲 4)

謝辞

今回の訪問に際し、ご対応いただきました東京都市大学小川清美教授、職員の皆様に心よりお礼申し上げます。